

チャレンジ！！オープンガバナンス 2019 市民／学生応募用紙

地域課題タイトル (注1)	No.	タイトル	自治体名
	25_3/3_1	ICTを活用した、子どもたちのよりよい読書活動の推進につながる選書情報のアイデア	四国 愛媛県 松山市
アイデア名 (注2) (公開)	ビブリオバトン		

(注1) 地域課題タイトルは、COG2019 サイトの中に記載してあるエントリー自治体(連合)が掲げる地域課題を記入してください。

(注2) アイデア名は各チームが応募されるアイデアにつけるものです。アイデアにふさわしい名前を付けてください。

1. 応募者情報

チーム名 (公開)	Code for DOGO ビブリオチーム		
チーム属性 (公開)	<input type="radio"/> 1. 市民によるチーム <input type="radio"/> 2. 学生によるチーム <input checked="" type="radio"/> 3. 市民、学生の混成によるチーム		
メンバー数 (公開)	6名		
代表者情報			佐々木 隆志
メンバー情報	氏名 (公開)	兼久 信次郎	

(注意書き) ※ 必ず応募前にご一読ください。

<応募の際のファイル名と送付先>

1. 応募の際は、ファイル名を COG2019_応募用紙_具体的チーム名_該当自治体名にして、以下まで送付してください。東京大学公共政策大学院の COG2019 サイトにある応募受付欄からもアクセスできます。

admin_padit_cog2019@pp.u-tokyo.ac.jp

<応募内容の公開>

2. アイデア名、チーム名、チーム属性、チームメンバー数、代表者と公開に同意したメンバー氏名、「アイデアの説明」は公開されます。

3. 公開条件について：

「アイデアの説明」でご記入いただく内容は、クリエイティブ・コモンズの CC BY (表示) 4.0 国際ライセンスで、公開します。ただし、申請者からの要請がある場合には、CC BY-NC (表示-非営利) 4.0 国際ライセンスで公開しますので、申請の際にその旨をお知らせください。いずれの場合もクレジットの付与対象は応募したチームの名称とします。

(具体的なライセンスの条件につきましては、<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/legalcode.ja>、および、<https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/legalcode.ja> をご参照ください。また、クリエイティブ・コモンズの解説もあります。<https://creativecommons.jp/licenses/>)

4. 上記の公開は、内容を確認した上で行います。(例えば公序良俗に違反するもの、剽窃があるものなどは公表いたしません)

5. この応募内容のうち、「3. 自治体との連携」は、非公開です。なお、内容に優れ今後の参考になりうると判断したものは、公開審査後アドバイスの段階で相談の上公開することがあります。

<知的所有権等の取扱い>

6. 「アイデアの説明」中に、応募したチームで作成・撮影したものではない文章、写真、図画等を使用する場合、その知的所有権を侵害していないことを確認してください。具体的には、法令に従った引用をするか、知的所有権者の許諾を取得し、その旨を注として記載してください。「自治体との連携」中も同様をお願いします。

7. 「アイデアの説明」中に、人が写りこんでいる写真を使用している場合、使用している写真に写りこんでいる人の肖像

権またはプライバシーを侵害していないことを確認してください。

<チームメンバー名簿>

チームメンバーに関する情報を最終ページに記載して提出してください。（2. の扱いによる代表者氏名を除き、他のメンバーに関する情報は本人の同意があるものを除き COG 事務局からは非公開です。詳細は最終ページをご覧ください。）

2. アイデアの説明（公開）

(1) アイデアの内容、(2) アイデアの理由、(3) 実現までの流れ、の三項目に分けて記入してください。

必要に応じて図表を入れていただいて結構です。

(1) アイデアの内容（公開）

アイデアは、課題解決のために、何をやる社会的なサービス（活動）なのか、をわかりやすく示してください。これが将来実現した場合、魅力的で新規性があり、実践したり、活用したくなる、そしてその結果として、課題が解決される、そんなワクワク感のあるアイデアを期待します。2ページ以内でご記入ください。

<応募チームとして解決したい課題>

図書それ自体はあくまで情報の伝達手段であり、読書活動も単純に時間や冊数で量れるものではないが、数値化できる指標だけをみても子供たちの読書機会は漸減しており、この傾向は親の読書習慣に大きく影響を受けることが示唆されている。このことは読書機会の世帯による偏りとしてあらわれ、ひいては社会において人々が対話するために欠かさない知性の分断にもつながる。本アイデアは地域に縁（ゆかり）のある人と司書が共に子供のより良い読書活動を助けるとともに、その経験を新しい選書情報として蓄積し活用しようとするものである。

<解決アイデアの内容>

本アイデアは図書を紹介してもらうという点でビブリオバトルに類似するが、単一の図書そのものを推薦するビブリオバトルとは異なり、むしろ図書を媒介として、多様な人の生き方、考え方に触れ、結果として人それぞれにとってより良い読書活動の助けとなることを意図している。図書それ自体は情報媒体の一つに過ぎないが、人の意思で現物としてそこにあり続けたり受け渡しされたりすることによって情報媒体以上の役割を担うことができると考える。これを反映して我々は本アイデアを「ビブリオバトン」と名付けた。

本アイデアはネットでの取り組みと現場での取り組みに分けられる。

ネットでの取り組みでは、地域に縁（ゆかり）のある人に自身の読書体験を語ってもらいながら図書を紹介してもらい、これを動画としてYouTubeなどの動画チャンネルと図書館のホームページで継続的に公開する。動画には図書館の司書による選書をつける。この選書は動画で紹介された図書に関連したテーマや隣接領域に含まれる蔵書を中心とする。

現場での取り組みでは、選書を市内の図書館およびその分館、移動図書館において配架する。司書に対しては、限られた蔵書からできるだけ多くの市民が手に取ることができるよう、分館や移動図書館への配本を考慮した上での魅力的な選書が求められる。ここでの市民からのフィードバックを参考に、相互貸借を含めた学校図書館との連携を図る。

以上をまとめると本アイデアは「動画」「選書」「配架」「連携」となる。

1. 地域に縁のある人による本の紹介動画

地域に縁のある人が子どもの頃にどのような本を読んだか、今の自分に至る上でどのような影響を受けたか、などを動画の中で語ってもらう。子どもにとって共感の対象となりうる人物であるように心がける。子供にとって同世代の小学生、中学生、高校生や、卒業生で活躍している著名人などのほか、地域で活躍している社会人、地域を出て活躍している社会人、移住してきた人、Uターンしてきた人などを考えている。

動画はYouTubeなどの一般的なチャンネルと図書館のウェブサイト、書誌データベースシステムなどで公開する。読

書習慣のない家庭あっても、子どもは芸能、スポーツ、ゲーム紹介などの動画に触れる機会を持ちうることから、親の読書習慣の影響を越えてリーチできる可能性があると考え、本アイデアでは動画を中心に据えた。

2. 司書による関連および隣接領域の選書

動画で紹介された図書そのものだけでなく、その図書の著者、時代、テーマ、分野などで関連および隣接する領域の図書を司書が選書し動画に付加するとともに、図書館の貸し出し予約ページなどに簡単にアクセスできるようにする。図書館では多くの複本を所蔵することがむずかしく、さらに点在する分館や移動図書館では所蔵も限られていることから、動画で紹介された図書そのものを多数貸し出すことは難しい。しかしながらその範囲内で可能な限り読書活動の助けになるよう司書が選書する。場合によっては選書のプロである司書と動画への出演者がコンタクトを取りながら選書を行うこともありうる。

3. 市内の図書館及びその分館、移動図書館における配架

松山市では中央図書館と3つの分館、移動図書館により図書館事業を行っている。できるだけ多くの市民にとって読書活動の助けとなるよう、これら間での配架を行う。

4. 学校図書館との連携

中央図書館や分館に近い地域の子どもは自らの足で図書館に行くことができるが、それ以外の多くの地域の子ども、とくに低年齢の子どもにとっては学校図書館が最も身近な図書館である。市立図書館では学校図書館との間でも相互貸借を行っているが、その際の選書に本アイデアでの選書情報を活用する。特に動画への出演者が学校の卒業生など身近に感じられる人物の場合、司書教諭だけでなく出演者が在籍していた当時の教諭も含めた連携を図ることができると考えている。

以上の4つの取り組みが子どもの読書活動を助けるとともに、そこからのフィードバックを選書情報として蓄積することで、図書館と司書が今まで以上に子どもたちの読書活動に貢献できると考えた。

(2) アイデアの理由（公開）

このアイデアを提案する理由について、それを**サポートするデータを根拠として示しつつ 2 ページ以内で説明**してください。ここではアイデアの必要性、効果を確認します。データとは、統計類の数値データやアンケート・インタビューなどの資料や関連の計画、既存の施策などの定性データのことを総称します。データは出所を明らかにしてください。

2019 年 12 月 3 日に発表された OECD 学習到達度調査(PISA)で、日本の高校 1 年生の読解力が低下したことを受け、読書不足や思考力の低下といったセンセーショナルな報道がなされた。しかしその因果関係は明らかではなく、ましてや読書活動は単純に時間や冊数で量れるものではない。読書活動の低下を示唆するとされる調査としては文化庁の「国語に関する世論調査」、文部科学省の「子供の読書活動の推進等に関する調査研究報告」、全国大学生協同組合連合の「学生生活実態調査」、全国学校図書館協議会の「学校読書調査」などが挙げられるが、各調査において教科書や専門書や電子書籍が読書に含まれるか、冊数や時間だけで量れるのか、などが異なり、これらが読書活動を正しく計っているのか疑問が残る。全国学校図書館協議会の主催する青少年読書感想文全国コンクールでは図書を紙媒体のものに限っており、ネット情報のまとめ本は対象になるが著作権が切れて電子化された文学作品は対象外という。このように読書の定義や読書活動の評価指標はあいまいであるし、どのような読書活動をもって良しとするかを一概に定められるものではない。そもそも良し悪しを云々するものかも定かではない。

日本図書館協会の統計によれば、今世紀に入ってから現在までの間に年間受入図書冊数や資料費は低下し、公共図書館の職員数は約三分の二に減少した。一方で貸し出し件数は個人および団体共にやや増えつつ増減を繰り返していることから、件数だけを見れば国民全体の読書活動が低下しているとは言えない。実際、市立図書館にヒアリングしてみると、ビブリオバトルや来館者による選書ワークショップなどで選書され配架された図書はすぐに貸し出されていくという。限られた職員数のなかで、工夫を凝らして来館者のニーズに応えている。

ヒアリングの中で推測されたことは、図書館を身近に利用している世帯とそうでない世帯の格差である。特に低年齢の子どもが来館するには親に頼るしかない。そのため親が読書習慣に乏しい世帯であれば、連鎖的に子どもの読書習慣も乏しくなる可能性が想像できる。このことは厚生労働省「21 世紀出生児縦断調査」などからも読み取ることができる。

本アイデアは、読書習慣の乏しい親の影響を避けて子どもの読書活動に直接リーチする方法はないか、という発想からきている。

(3) アイデア実現までの流れ（公開）

アイデアを実現する主体、アイデアの実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）の大まかな規模とその現実的な調達方法、アイデアの実現にいたる時間軸を含むプロセス、実現の制度的制約がある場合にはその解決策等、アイデア実現までの大まかな流れについて、2 ページ以内でご記入ください。ここでは実現可能性を確認します。

動画の収録、編集については Code for DOGO のメンバーだけでなく地域の学生ボランティアを予定しているが、動画は数分と短く、収録のための機材は手持ちのものを使用するため、大きな資金は想定していない。収録にスタジオが必要な場合は、愛媛大学総合情報メディアセンター内のスタジオを使用する。動画の公開には YouTube チャンネルと市立図書館のウェブサイトを用意しており、後者については現在使用している書誌情報データベースにもリコメンデーションなどの付加情報を掲載する機能があることを確認している。動画への出演を依頼する人選については今後の作業である。

選書と配架については松山市立中央図書館の司書とミーティングを行っており、分館および移動図書館の蔵書についても把握している。特設の書架についてはビブリオバトルや選書ワークショップの開催実績がある。

学校図書館との連携については、松山市立中央図書館と学校図書館との間で相互貸借を実施している。今回の取り組みで得られた知見、松山市教育委員会と愛媛大学教育学部との間での連携の場も活用し分析する。

